

序

鳶野克己先生には、2021年3月をもって定年の期を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生のこれまでの御功績を称え、深い感謝の意を表すため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

鳶野先生は、1978年に京都大学教育学部をご卒業後、同大学大学院教育学研究科教育学・教育人間学専攻修士課程に進学され、修了後には同後期課程に進学、1983年に同後期課程を学修認定退学されました。その後、京都大学研修員を務められ、1984年4月より光華女子大学文学部専任講師に着任され、助教授、教授職を経て、2001年10月に本学文学部哲学科教育人間学専攻に教授として着任されました。当時教育人間学専攻は設置まもない頃で、2005年にあらたに設置された教育人間学専修においてもそうなのですが、鳶野先生は専攻の基礎をつくりあげられたお一人といえます。そして当専攻は人間形成、臨床教育、心理健康という3つの研究領域で成り立っているのですが、鳶野先生はこれら異なる専門領域の教員たちをまとめられる重鎮のお一人として、教育人間学専攻には欠かせない存在です。

先生には大学行政へも大きく貢献いただいています。専攻主任はもちろんのこと、2004年度には入試担当主事（現入試担当副学部長）を、2010年度には文学研究科長を、2014年7月から2017年7月までは学校法人立命館評議員を務められ、大学の発展に寄与されています。先生のご見識の高さ、温厚なお人柄が誰からも厚い信頼をえているからでしょう。

一方で先生は、日本教育学会、教育哲学会、関西教育学会、The International Society for Humor Studies、アメリカ教育学会、日本笑い学会、臨床教育人間学会等、多くの学会に所属され、一部では委員や副会長も務められ、その研究領域は幅広く、そしてたくさんの成果をあげていらっしゃる。なかでも目を引くのが「臨床的な教育人間学研究」と「笑い」の研究です。後者の研究成果のうちの1本「『生きることのおかしさ』をめぐる人間学的一試論－滑稽で、いぶかしくて、すばらしい－」（『追手門学院大学笑学研究年報』第5号）により、2020年9月には、日本笑い学会学会賞佳作を受賞されています。先生がこのように「笑い」に学術的、それも肯定的な意味を付与してくださることは、関西の人間の私としてはたいへん嬉しく思うしだいです。

これまで人間研究学域教育人間専攻において鳶野先生は、教育・研究を通して数多くの優秀な教育者・研究者を育成されてきました。その先生が2021年4月からは、特任教授として、引き続き、あとしばらく教鞭をとってくださるとのこと、感謝の念にたえません。今後とも、立命館大学、文学部・文学研究科へのご鞭撻を賜ることができれば幸いです。

2021年1月

立命館大学人文学会会長

文学部長・文学研究科長

中 川 優 子

